Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P—512 ホルモン補充療法における新しい血清エストラジオール測定キットの有用性に関する研究

島根医大
尾崎智哉，高橋健太郎，栗岡裕子，神農 隆，宮崎康二

【目的】ホルモン補充療法（HRT）が定着した現在、血清エストラジオール(E_2)の測定は重要な意義を有す。血中E_2測定においては種々のモノクロナール抗体が作成され、検討されているが、E_2以外のエストロゲン（E）およびその誘導体に対する交差反応性が高く、正確なE_2値を反映していない。今回、新しく開発された、E_2以外の交差反応性の低いE_2測定キットが、従来の測定キットと比較して、どのような利点を有するかを検討した。【方法】当科内分泌・更年期外来を受診した患者142人を対象とした。血中E_2の測定はRIA法で行い、Coat-A-Count E_2-6試薬（RIA E_2-HRT）とCoat-A-Count E_2 試薬（RIA E_2）を用い、E製剤投与の有無で比較検討した。なお、E_2 ratio (RIA E_2/RIA E_2-HRT)≧2の場合をE_2の解離と定義した。【成績】薬剤の投与のない症例では両試薬間のE_2値の相関は($y=0.894x+6.62$, $r=0.989$)と良好であり、E_2 ratioも1.02±0.19で解離は認められなかった。同様に、E_3製剤、E_2貼付剤も良好な相関で、解離は認められなかった。しかし、結合型E製剤は$y=1.781x-3.30$, $r=0.966$の相関で、キット間で相違が認められ、E_2 ratioは1.83±0.68で解離が24.4％に認められ、全症例で従来のRIA-E_2試薬の方がRIA E_2-HRT試薬よりも高値であった。【結論】HRT施行中の血中E_2値は治療上マーカーとして重要であるが、結合型E製剤を投与中では従来のキットで測定したE_2値は約2倍高値を示すので注意を要することが明らかとなった。また、新しい、Coat-A-Count E_2-6試薬は交差反応性が少なく、E_2値を正確に反映しており、HRT施行時の血中E_2値の測定に有用であると推察された。

P—513 高感度測定法による各種HRT施行中の血中エストロゲン濃度の推移の検討

徳島大，高知赤十字病院*，浜田病院**，三菱化学BCL***
岡田典子，山田正代，木下宏実，上村浩一*，米田直人**，安井敏之，苛原稔，青野敏博，三浦雅一***

［目的］HRTの有効性と副作用の発現は血中エストロゲン濃度に左右されるため，HRTの投与法の選択には血中エストロゲン濃度を正確に把握する必要がある．そこで，本邦婦人を対象としたHRTの際の目安とする目的で，各種HRT施行中の血中エストロゲン濃度の推移を高感度測定法により検討した．

［方法］当科外来でHRT施行中の患者を，同意を得た後，結合型エストロゲン(CEE)0.625mgと酢酸メドロキシプロゲステロン(MPA)2.5mgによる連日投与群（A群40例），CEEとMPAの隔日投与群（B群23例），経皮エストロゲン剤(2mg 1枚/2日)とMPAの連続投与群（C群18例）の3群に分け検討した．薬剤の投与後12～18時間で採血することとし，治療前，治療開始6カ月後，1年後，2年後の推移を検討した．エストロン(E_1)およびエストラジオール(E_2)の測定は，HPLCとRIAを組み合わせた高感度でかつ精度の高い測定法により行った．

［成績］治療前のE_1値はいずれの群も12～22pg/mlの低値であったが，HRT6カ月後ではA群，B群，C群でそれぞれ平均131.0，74.8，38.7pg/ml，1年後では平均135.0，73.4，41.2pg/ml，2年後では平均168.8，70.3，45.7pg/mlと有意に増加していた．一方，E_2値については，治療前はいずれの群も3～6 pg/mlの低値であったが，HRT6カ月後では平均20.3，15.9，57.1pg/ml，1年後では平均21.3，15.3，51.8pg/ml，2年後では平均24.2，15.8，61.9 pg/mlと有意に増加していた．

［結論］CEEによるHRTでは15～25pg/ml，経皮エストロゲン製剤は50～60pg/mlとCEEに比べて約2～3倍高いE_2濃度で，E_1濃度はCEEが経皮製剤に比べて約3～4倍高い濃度で更年期障害や骨粗鬆症の治療が行われていることが明らかとなった．

NII-Electronic Library Service